
電腦コイル いつか花のように

此花耀文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電脳コイル いつか花のように

【Nコード】

N3357I

【作者名】

此花耀文

【あらすじ】

アニメ「電脳コイル」最終話本編直後の物語。ヤサコにいざなわれ、この世界に戻ってきたイサコ。退院し大黒を離れるまでの短い時間、彼女が見た夢とは…

1. タベ

小此木優子。

その名前を思い出すたび、甘やかな憩いと刺すような痛みが同時に私の心によみがえる。

彼女と最後に会ったのはもう半年も前のことだ。それとも、まだ半年しかたつてないと言ったほうがいいのだろうか。彼女と同じ道を探したあの頃の出来事は、私の心の中心に余りにも高く聳えていて、そこからどれだけ離れたのか、まだうまくつかむことができない。

けれども、これから新しい道を歩むごとに、度し難いその記憶も少しずつその大きさを失っていき、いつしか片手で扱える懐かしい思い出となって、心の引き出しに収められるのだろう。引き出しには「大切な記憶」というラベルが貼られるけれど、その中身は砂時計の砂のように少しずつ毀たれ、いつしか淡い郷愁の光の中に沈んでいくのかもしれない。

でも、彼女のことは決して忘れない。

彼女が私を導いてくれたあの日、厚い壁で何重にも取り巻かれ、永遠の孤立を成したかに見えた私の世界は、晴れた空にとける雲のようにあっさりと光の中に消えていった。どうしようもなく甘くて懐かしい、だけれどどうしようもなく孤独なその場所から私を救い出してくれたのは、おとなしく目立たない性格の、おおそヒーロとはかけ離れた子だった。

それは私にとって意外なことだった。私は彼女みたいな子は好き

じゃなかったからだ。以前の学校にも、「子供らしい優しさ」を氣取って近づいて来ながら、その裏には変に世間ずれした打算とおびえが見え隠れする、いつも誰かの影に身を置いている臆病な子たちはいくらでもいた。そんな子たちの見せる卑屈な視線や、現状にしがみつくと怯懦が氣に入らなくて、私はことさらにきつく当たって払いのけてきた。けれどどうしてだろう、大概の子は私がそうやって露骨な嫌悪を示すと逃げ出したり、陰湿な嫌がらせをする側に回ったりしたのに、彼女は逆に近づいてきた。やがて、彼女の言葉は私の心を震わせることになり、堅牢な壁の向こうから注ぎ込まれた痛いくらいに眩しい光の力で、私はこの場所に帰ってくる事ができた。

一体彼女の中のどこにそんな強さが潜んでいたんだろう。私もいつかそんな力を持つことができるだろうか。私はその強さに憧れる。

もしかすると、と私は考える。私はあの時も一度この世に生み出されたのかもしれない。私が目を開けた時彼女が見せてくれた微笑みは、生まれたばかりの子供に対する祝福と激励だったに違いない。だから私は、初めて光に満ちた世界に受け入れられた胎児が不安と希望をもつてするやり方で、不器用に彼女を抱きしめ、慈しんだ。その時私はやっと理解することができた。私の世界は閉じてしまったんじゃない、まだ始まってさえいなかったんだ。

だからこそ、なのだろうか、その日、彼女やみんなが出て行ったあとの病室はがらんとしてしまつて、立ち上がる取掛かりさえないような氣がした。今まで私が、これが世界だと信じこんでいたものは全て崩れ去つてしまつて、知っていることなんて何一つないみたいだ。でも、それは決して怖いとか不安だとか言うわけではなく、むしろ暖かな心地よさだった。なんだかふわふわして、頼りないよな、それでいて安心したような夢見心地の中、私は歩く方法すら忘れてしまったかもしれないくらいに無垢だった。無心に見つめ続

けていた天井は次第に輪郭を失って、のびやかな未来そのものみたいな優しい白となって私を包んでいった。

ふと声が聞こえた。

誰かが私を呼んでいた。その声は、白が織りなす世界の、あえかな、更紗が風に寄せられてできたような翳りから聞こえてきた。低く呟くようなその声が何を言っているのかはよく聞き取れない。少しでもよく聞こえるように耳を傾けていると、いつの間にか目の前の白がスクリーンになって、少し陰のある目をした少女の姿を映し始めた。

少女は何かを目指して白い世界を風のように進んでいく。その姿は見ていて小気味よい。だが何故だろう、少女が通り抜けたあととはそれまでの清浄を失って灰色に濁り始める。見ているうちにその濁りは増殖し、前を進んでいく少女に追いつがっていく。少女はそれに気がつかない、あるいは気がつかないふりをしている。危ない、このままじゃ捕まる。私は思わず目を伏せた。

「天沢さん」声が近くで囁いて、私は一気に現実へかえった。うとうとしてしまったようだ。

少し心配そうな顔をした彼女の顔がそこにあった。

「小此木……まだ帰ってなかったのか」

「天沢さんのかわいい寝顔が見たくてね」

しばらく前までの私なら確実に無視していた。その時もそうしようと思った。いくら恩人だつてなれなれし過ぎだ。

でもできなかった。気がついた時には私の顔は真っ赤だったからだ。

「くくつ、天沢さん真っ赤」

言われなくてもわかつてる。

「……」

「あっごめんなさい」

所在なさにな貞寝を決め込むと、彼女はあわてて謝る。ころころ表情の変わる子だ。にくまれ口の一つも言ってやろうと起きあがったら、涙がひとしずく頬を伝った。

「天沢さん……」

「小此木。さっき言えなかったことを言っておく。私を迎えに来てくれてありがとう」

一言ずつゆっくりと、朗読するようにはっきりと発音した。よかった、最後までうまく言えた。

「……うん」

彼女ははにかむように微笑んで頷いた。その笑顔があんまり暖かくて、もう一筋の跡がつきそうになったから、私は少し慌てて話題を変えた。

「それで、何しに来たんだ？」

「別に用ってわけでもないの。帰りがけに様子を見ていこうと思って。眠ってるようだったからそのまま帰ろうと思ったんだけど、ごめんなさい、ちょっとうなされてるみたいに見えて声をかけちゃった」

「うなされてた……私がか」言ってから我ながらその間抜けさに呆れた。私以外誰がいるんだ。

「あなた以外誰がいるのよ」

こいつ、人の失言には的確に突っ込んでくる。初めて知った彼女の意外な一面。これは私だけが知っている彼女の姿だろうか。それとも、知らないのは私だけで、彼女の友達はそんなことづくにわかっているのだろうか。

「実はちよつと妙な夢を見てたんだ。うなされてるように見えたのか」

「うん、少しだけ苦しそうな顔をして、つぶやいてた」

「なんて」

「『ごめんなさい』」

私が「ごめんなさい」って……謝ってたのか？ 誰に？ なんで？

そもそも今の話と私が見ていた夢とは全然一致しない。

「どういうことだ？」思わず聞いてしまう。

「私に言われてもわからないけど」

わからないと言った割に、彼女は何か少し言いよんどんで視線をそらした。この目。この目を私は以前にも見たことがある。そうだ、転校してすぐのころだったか、下駄箱のところで「友達になろう」と手を握られた時だ。

それを思い出したのと同時に、私はその時自分が彼女に何を言っていたか思い出した。その瞬間、周りの風景は全く変わってないのに、舞台が暗転するみたいに病室が丸ごと沈み込んだような気がした。そうしたら彼女のほうを見られなくなった。なんであんなことを言っただろう。言うことができたんだろう。

「天沢さん、どうしたの？ 具合が悪くなっただなら、先生呼ぼうか」
私ははつきり青ざめていた。ナースコールに手を伸ばしかける彼女をとどめる。

「いいんだ。大丈夫」

そして勇気をもって彼女を見上げようとした。

「悪いけど、今日はもう帰ってくれないか」

違う。こんなことは言おうとしていない。焦る心とはまるで別の生き物みたいに、私の体は彼女の真逆を向いてベッドにもぐりこんだ。
「ごめんなさい、疲れてるのに話しこんじゃって」

「いや、いいんだ」

「それじゃ、またお見舞いに来るね」

「うん」

私の体はまだ動かない。彼女は帰ってしまう。

「……天沢さん」

彼女が近づいてくる気配があった。肩に手が置かれた瞬間、私は滑稽なほどに動揺して、びくつと体を震わせてしまった。なんでそんなことができるんだ。私はあなたにひどいことをしたのに。

「さっき天沢さんが見てた夢、きつととても大切なことだと思う。」

言わなくてもいいから、忘れないで考えてみて」

混乱する思考の中で彼女の言葉は意味をなさず、響きの編隊飛行になって私の頭の中を飛び回る。何とか「うん」とだけ答えた。もういい、離して。離してくれないと私の心は膨れ上がる罪悪感で破裂しそうだ。

気が付くと病室にはもう誰もいなかった。うす闇が、端のほうから少しずつ室内を満たしていく。そのぼんやりした灰色が他の色すべてを覆い尽くしたころ、私はやっと起き上がることができた。

「小此木は私を助けてくれた。私は他人を受け入れる強さを手に入れたんだ」

言葉に出して言ってみた。でも、その声は細く、小さく、部屋を支配する灰色に吸い込まれていった。

2・夜

小此木。小此木。小此木。繰り返し呼べば呼ぶほど、言葉は磨滅して空疎な音の連なりに還っていく。だがその残滓は消えることなく、しぶとくまとわりついた意味のかけらが熱を持って病室に溜まって、やがて私の息を喘がせる。

夜になって私は高熱を出していた。先生は多分イマーゴの副作用によるものだろうと言っていたけど、「原因不明」を言い繕っているに過ぎないだろう。原因は私にはよくわかつている。これは彼女に対する甘えなんだ。彼女に会いたい。

それで、とどこか心の奥から意識の幽かな道を通ってやってきた誰かの声が、低く問う。会ってどうするの。無視してごめん辛く当たってごめん本当のことを言わなくてごめんこれからはずっと側にいたいんだから優しくして私に微笑んで私だけを見て私を助けて守って、って地面に頭をこすりつけて頼むの？

本当のことを言うと、そうしてしまいたい気持ちはある。私には誇れるものなんか何もない。これから一人で生きていく自信もないだから、彼女の優しさのにこ毛に包まれていつまでも自分の流す涙のしずくを数えていたい。

でも、それじゃ駄目なんだ。それじゃ、アツチにいた時と変わらない。私がそんなことを言ったら、彼女は今度こそ私を見捨てるだろう。自分の足で立たなくちゃ。こんな甘えは捨てられる。だから私は立ち上がることができる。

自分一人で立てると証明したくて、私は無理に起き上がった。窓まで歩こうとすると、情けないことにやっぱり足取りが現実感を失ってふらふらする。それでも何とか数歩を進んで窓にたどり着き、ガラスをいっばいに押しあけて体の隅まで伝わるように息を吸った。

変に熱を帯びた私の中を夜風が心地よく渡って、心と体をさましてくれる。

胸のあたりに鈍い痛みがあった。こっちは本当にイマーゴの後遺症だろう。全然構わない、というよりかえってありがたい、こんな痛みに耐えることですむのなら。むしろ痛みを失うのを恐れるかのように、わざとベッドに戻らず窓辺に立ち続ける。が、それがいけなかったのだろうか、息が詰まるような感覚に悪い予感が込み上げた瞬間、これまでにない激痛が突然私を襲った。身体感覚と意識のすべてが痛みに凝集され、私はなす術もなくその場に倒れこんでいた。胸が押しつぶされるようで呼吸ができない。メガネはもちろん掛けていない。医療用のバイザーもさつき暑苦しくて外してしまい、ベッドの上だ。どうにかしてベッドまでたどり着いて、バイザーがナースコールで人を呼ばないと。

ベッドまではほんの２メートル足らずだ。そこまで這って行つて、上体を起こせばいい。ただそれだけのことだ。それだけのことが、今の私には限りなく不可能に近い苦役に思われた。でも、やらなくちゃ。体を動かそうとすると、胸のあたりから手足の先まで体を貫く光のように痛みが走り、思わず身を縮こめた。やはり暗号の使い過ぎが原因だろうか。特に小此木の家で見つけたメタタグは負担が大きかった。小此木は慣れもしないでよくあんなの使えたな。まずい、もうどうしようもなく痛い……

プロメテウス。唐突に頭に言葉が浮かぶ。神から火を盗み人に伝えたプロメテウスは、その罰として永遠の苦痛を与えられる。永遠の苦痛、苦しむただけに生きる者。初めてその話を聞いた日は、そんなものがあり得ると考えるだけで、恐ろしさと絶望に夜中まで眠れなかった。それから、プロメテウスの名前は私にとって一種の呪文になった。恐怖や苦痛、絶望や不安に耐えがたさを感じた時、心の中でプロメテウスの劫罰を思うことで、自分の苦しみを忘れることができた。

プロメテウス。プロメテウス。繰り返して唱えて痛みから気をそらしながら、どうにかベッドの足まで這い進む。ここから上半身を起こして腕を上げればいい。まずは普通に両腕をついて体を起こそうとした。途端に、心臓を直接掴まれるような衝撃が走って、私はその場に崩折れた。身をよじって呼吸を抑え、じつと痛みをやりすくす。今のやり方はだめだ、心臓に負荷がかかりすぎる。しばらく我慢して、ようやく手足を動かせるようになったところで、今度はベツドの脚に腕をからませて上体を起こそうとした。しかし、力を入れようとするとどうしても腕が滑り落ちて起き上がることができない。私の両手は何度もむなしく宙をかいた。

言うことを聞かない身体と格闘しながら、私はだんだん悲しくなってくる。どうして私だけがこんなに暗い、誰もいないところで結果も見えない戦いを続けなければいけないんだ。お兄ちゃんの時だってそうだった。私がお兄ちゃんのためにどれだけ身を削って力を尽くしたか。そんな私の行いに、現実は何をもって答えたか。

どうしても生きることができないならどうすればいい？ 何回目かの試みが徒労に終わった時、私は絶望したというより不貞腐れたような気持ちになって床に転がった。生きたくたって生きられない子だっている、どうしても「みんなと一緒に」には進めない子だっている、そんな子たちをまとめて横並びにして、生きることはいいと、だから皆で生きなさいって言ったって、そんなの傲慢だ。生きられないなら生きない自由だってある。あなたの痛みと私の痛みは違う、私の痛みは私にしかわからない、そうだと、答えてよ、もういいって言ってよ、ヤサコ！

「私にはあなたを苦しめる権利はないわ。でも、これだけは覚えていて。私はこれから流れていく時をイサコと進みたい」
私にはその時、闇の中に差し伸べられた手がくつきりと見えた。だからそれをつかみ取ろうと手を伸ばした。

気がつくと私はベッドの上で上半身を起こし、開かれた窓の外を見つめていた。窓からは何もなかったかのように夜の穏やかさをたたえた風が吹き込み、わずかに残った私の熱を散らしていく。あの手は夢だったのだろうか。それとも今の出来事全てが？

でも、夢か幻覚かそれとも奇蹟か、そんなことはどうでもよかった。

忘れていた。何より大切なのは、私はもう一人ぼっちじゃないってことだ。

「わかった、一緒に行こう」私は、生きていくことを決めた。

3・昼下がり

次の日、私の熱はすっかり下がっていた。精密検査の結果にも特に異常が見つからなかった私は健康体と診断され（昨夜も結局人を呼ばなかったのだ）、近く退院できることになった。

診察の後、おばさんにお兄ちゃんの人形を繕ってもらった。

入院する前まで、私はこの人とうまくいっていなかった。自分の価値観でしかものを判断しようとせず、従わない者の言い分を認めずに「子供だ」と決めつける。何よりも自分が安心したくて、まっとうだと信じたものに相手を引きずっていかうとしているんだと思っていた。だから、口先でよくしたいなんて言われても、そこには親切の仮面をかぶった否定や抑え付けが垣間見えて、私はますます頑なになった。

でも、今になってみれば、おばさんはおばさんなりに私のことを思っていてくれていたことがわかる。おばさんは心を開かない私を見捨てなかった。他者を否定しようとしていたのは私だ。

午後の落ち着いた光の中で針と糸を使うおばさんの姿には、たった今行っている仕事への自信と肯定が、大げさに言えばこれまで人間が連綿と培ってきた生活の安定感に裏打ちされてあった。その力強さに触れると、ついこの間までの、普通の女の子であることに逆らっていた私が少し恥ずかしくなった。

「幸子さん、退院されたそうよ」無駄のない手の動きに見とれていた私に、唐突におばさんが言った。「これであなたも金沢に戻るわね」

その知らせ自体はある程度予期していたことだから驚きはなかったが、この場でそれを教えられたことは、私に決意を強いた。金沢に戻る前におばさんと過ごす機会は今限られる。できるうちに、お

ばさんに伝えなくてはならない。

「おばさん、あの」

「何ですか」

「今まで、ごめんなさい。…あと、ありがとう」我ながらつたない言葉だ。だが他の文句は思いつかなかったし、それにこれ以外の何を言っても上辺だけの美言になりそうな気がした。

「今になってそんな言葉が聞けるなんてね」返ってきたのは、取りようによっては辛辣な答えだ。少しこわかったけど、下を向いていた視線をおばさんのほうに向けた。その途端、裁縫の手を止めてまっすぐにこちらを見つめているおばさんの姿が目に入って、私はすぐにまたうつむいてしまった。

数秒間、気まずい沈黙が下りた後、おばさんが何か言おうと息を吸い込むのがわかった。

言わせてはならない。その言葉が肯定であれ否定であれ、私が投げておばさんが返したボールを、おばさんに拾わせるのはルール違反だ。取り決めを守って他人と言葉をつなぐ。多分私はここから始めて、自己と他者との道の作り方を学び直していかなければならないんだ。

「あ、あの」とにかく口に出した。が、頼りない声だ。その上、言うべきことは全く決まっていなかった。

「何かしら」

「あの…」声のトーンが明らかに落ちている。見つからない。焦れば焦るほど、私の気持ちにはもやがかかって、心から遠のいていく。その代わり目の前のおばさんの存在ばかりがどんどん大きくなり、か細い私の声などおばさんに届く前に霧消してしまうのではないかという不安が、泥のようにまとわりつく。

だめかな。次々と湧き出るおそれと諦念の淀みに沈みかけたその時に、ほんの短く、声が聞こえた。

「あなたの名はイサコ」

思わず辺りを見回したが、おばさん以外の誰もいるわけがない。けれど、その言葉は不思議な浄らかさで私にとりついた濁りを払ってくれた。心に言葉が戻ってくる。

私はまっすぐおばさんを見つめて、話し始める。

「私はこれまでおばさんに迷惑ばかりかけてきた。

今はなくなってしまったけど、私には大切な目的があった。私は、一人でそれをやり遂げる、誰の力も借りないって思ってた、それで自分勝手に行動してきた。でも本当は全然一人じゃなくて、結局おじさんとおばさんが私の面倒を見てくれていたんだってことに気付かなかった。

今度のことも、私が相談もなく行動してこんなことになってしまつて、それでもおじさんもおばさんも私を責めたりしないで、世話をしてくれる。

やっとそれがわかつたの。だから今までのことを謝りたくて、それとお礼も言いたかつた」決して流暢ではなかつたが、確かな口調だつた。

「あなた、この何日かで少し大きくなつたわね」

私をじつと見つめてから答えたおばさんの目は、ゆるやかに微笑んでいるようにも見えた。

「この間までのあなたは私から見たらまだほんの小さな女の子だつた。それなのに年上ぶつて行動するあなたに、私もちよつと反感をもつたのね。だから、ことさらにあなたを子供扱いしてしまつたのかもしれない。私のほうこそ悪かつたわ。…金沢に戻つたら私たちのことなんてすぐに忘れてしまうのかも知れないけれど、年賀状くらいは書いて頂戴ね」

「はい」私はおばさんにためらいのない笑顔を向けた。

「あなた、そんなふうに笑うことができたのね」おばさんはやや呆れたように言つてから、少しずつ嬉しそうな顔になつた。

一人になってから、少し音楽を聴いた。ツェムリンスキーの「人魚姫」。有名な童話に題を取った作品だ。

入院中退屈しないようにと、おじさんが私の部屋にあった音楽ファイルを持ってきてくれたのだ。と言っても私は最近まで音楽を聞くことなんてほとんどなく、開けてみると、そのファイルは元々私の実家にあった、母さんのものだった。多分クラシックの、名前もよく知らない作曲家が並んでいるので、とりあえずタイトルで選んでみたのだが、冒頭の重い弦の響き、それにたゆたうように寄り添う管の音色を聴いた瞬間、幼い日が再現した。

「人間の王子様に恋をした人魚姫は、魔法使いに頼んで人間になりました」

私を膝に抱いて音楽を聴きながら、母さんが筋を覚えてくれたその言葉が、ぽっかりと記憶を抜け出て、泡のように浮かび上がった。冷たい風の吹く冬の夜の、でもそこだけは別世界のようになごやかなオレンジの明かりが点った部屋だった。

「ですがそれと引き換えに人魚姫は声を失っていました。言葉を持たない人魚姫の心は王子様に届かなかったのです」

穏やかに響く言葉の中に、何故か遠い寂しさと頑なな孤独を感じた私は、母さんがそのままどこかに行ってしまうのではないかと不安になって、前に回された腕に力いっぱいしがみついていた。

「王子様は他のお姫様に恋をしました。人魚姫は海に身を投げ、泡となりました」

ヴァイオリンが奏でる人魚姫は最後まで可憐で一途に恋を見つめ、

破れて消えていく。悲劇的な幕切れに私はべそをかきそうになったが、音楽はなおしばらく続いた。楽曲は、人魚姫を慈しむように、始めは優しく、次第に力強く、これまでのモチーフをなぞり、滅びゆくものを見守る慈愛で幕を閉じた。

「泡に身を変えた人魚姫は海を越えてどこまでも高く、昇っていき
ました」

私以外の誰かに語りかけるような口調にいぶかしさを感じ、見上げた母さんの顔は、それまでと同じように優しく微笑んでいた。しかし、その瞳はまるで虚空を見つめるように、ここではないどこかに向かって見開かれていた。

あの母さんの目を見た刹那、私は悟ったのだ。母の心と私の心は違うのだと。人の心は目の眩む深淵で隔てられているのだと。

それ以来ずっと、私は、人と人とを繋ぐ道を探し続けてきた。そして、血のにじむ辛苦の末、私がやっと見つけたと思った道は、しかし間違っていた。それは、私自身の心に戻る出口のない道だった。

けれども、私には迎えに来てくれた人がいた。私は、他の誰でもない私に向けられたその眼差しを思い出す。だから私はこれから生きていける。

ふと、思った。母さんは、これから生きていけるのだろうか。母さんを助けられる人はいるのだろうか。
ぎくりとした。

あの時の母さんの目は、きっと父さんに向けられていたのだろう。でもそこに見える道は、かつての私と同じ、己に戻る道だ。

父さんに加えてお兄ちゃんまでを失った後、そんな母さんに手を

差し伸べられたのは、もしかすると私しかいなかったんじゃないだろうか。それなのに私は、お兄ちゃんのことばかり考えて、少しも母さんのことなんて顧みなかった。己が救われたい一心で、自身が他人の支えになるなんて思ってもみなかった。なんて傲慢で幼い子供。

母さんの事情が許すなら、退院した足でそのまま金沢へ戻ろう。そう思った。できるだけ早く、この気持ちやしぼんでしまう前に母さんに会いたい。

それなら、大黒小にはもう戻らないのか。私の心はまたたじろいだが、しばらく迷った末、「戻らない」と決めた。

多分、今の自分は他人との距離の取り方が分からなくなってしまうているはずだ。さっきおばさんとしたみたいに、少しずつやり直していかなくてはいけない。でも、いきなりあそこに戻って、これまでのいきさつを知っている人間と一緒にいることに、私は耐えられないかもしれない。今、私の心は長年まとっていた堅い殻をなくして震えている。最後に学校に行った日のような嫌がらせに会ったら、非力な心はぐずぐずに崩れてしまうか、前よりも強固で狭い殻の中に閉じこもってしまうかもしれない。

その時は彼女が助けてくれる、そんな甘い期待もあったが、だからこそそうしてはいけない、と思い直した。おそらく彼女は私を助けてくれる、でもそうしたら私は、これまでお兄ちゃんにしてきたみたいに、今度は彼女に頼り切りになってしまいそうだった。多分それは、私だけじゃなく彼女にも悪い結果をもたらすだろう。

でも、それなら彼女と会える機会ももう多くはないはずだ。彼女の姿が心をよぎり、私は胸を詰まらせた。少しだけ遠慮がちに肩をすくめた彼女の佇まい、心地よい熱のかよった彼女の手、柔らかく

て良い香りのした彼女の髪、そして全てを赦してくれる暖かさをもった彼女の微笑み、会って全てをしつかりと私の心に留めておきたい。

今日も彼女は見舞いに来るだろう。それは私にとってこの上なく大切な機会になる、そう考えた時、昨日見た夢のことを思い出した。あの夢の意味は今なら簡単にわかる。というよりは、昨日彼女に背を向けた時からわかっていて、気付かないふりをしていた。

あの声も、濁りも、私の罪を悔やむ思いだ。私は、これまでの行動によって、自分に親しく接しようとする周りの人間を傷付けてきた。それは償われなくてはならない。そうしないと、私は後悔という名の妄執に光を奪われ、再び道を見失っていくだろう。

だから、今度こそ彼女に謝らなければならない。

私は急いで自分の少ない語彙の中から言葉をあさり始めた。

4・再び、夕べ

私は大人びた子と思われることが多いようだが、小学生らしく漫画だつて読む。以前いた学校の図書室にあった漫画に、こんなシーンがあった。

ある医者が、ある女性の手術をする。女性は医者恋をしている。しかし、病は、女であることをやめなければ直すことができない。手術前、恋の終局に悲嘆する女性に、医者は語りかける。

「今この瞬間は永遠だ」と。

最初に読んだ時は意味がよくわからなかった。時間が過ぎゆくことは止められないのだから、「永遠の瞬間」なんて言い逃れか幻想だと思つて、それでその漫画のことは忘れていた。

夕方前になつて、小此木が来た。

「こんにちは」

「ああ」私の態度はかなりつつけんだっただろう。なぜそうなつてしまつたかという、要するに、私は困り果てていたのだ。

「小此木に謝らなければならぬこと」について考え始めた私は、それが小此木とのほぼ全てのやり取りにおいてあてはまることを発見した。さすがにちよつと愕然となつた。一体小此木に何と言えばいいのか。

もういつそのこと「これまでのこと、みんなごめん」と泣き崩れて彼女の足元にすがりつくか。そうしたら、小此木は私にビンタをくれて、「甘えちゃだめ、未来はこれからよ!」と、えらく前向きだけど、よく考えるとえらく当たり前な台詞を言うのだ。私は悔い改め、二人は目に星をいっぱいためて夕日に向かつて走り出す。

うふふあははと意味のない笑いを洩らしながら走り続ける甘美な妄想に浸っていたら、時間は瞬く間に過ぎてしまつた。

だから小此木がやってきた時、何一つ決まっていなかった。

「あら、今日もご機嫌斜め」

「いや、そうじゃない」

「そうね、それがあなたの自然体かも」

「したくてしてるわけじゃない」

「わかってる。あなたは本当は優しい子だもの」私の心の深いところをえぐる言葉。

「なんで」

「え」

「なんでお前は私の言っただけのことがわかるんだ」

「そんなの、顔を見ればわかるわ」

「私の顔はそんなにもの欲しげか」傾いた会話のバランスを、皮肉でなんとか戻そうとする。

「天沢さんって実はけっこうわかりやすい子だよ」だが、ずばりと返されてしまう。でも嬉しい。今まで私のことをそんな風に言ってくれる子はいなかったから。

よかった。何の脈絡もなしにそんな言葉が頭に浮かんだ。考えてみると、今の状況をこんなふうにうまく言い表している言葉もない。だって私は今すごく平凡なやりとりに安らいで、満ち足りた思いになっている。まさに、よかった、以外の何でもない。

いつの間にか微笑んでいる私を、小此木が微笑みながら見つめているのに気がついて、にっこり微笑み返した、その瞬間に我に返って、私は昨日同様真っ赤になって顔をそむけた。

「あれー、今のスマイルよかったのに」あ、よかったって言った。じんわりと心がぬくもる。

「からかうな」無論言葉には出さない。

「からかってなんかじゃないよ。天沢さん、学校でもその笑顔だったらもっとクラスの人気が出るよ」

学校と聞いて引越しのことを思い出し、それが表情に出かかる。気

取られないように急いで話を継いだ。

「つまり今は人気なしということか」

小此木の顔がさつと曇るのを見てから、ようやく自分の失敗に気がついた。実際、人気がないどころか嫌われ者だ。多分入院についても、口さがないうわさが飛び交っているのだろう。

不穏な思いが空気を淀ませて、なんとなく二人とも黙りこんでしまった。私はどうにかして小此木に謝らなくちゃいけないと焦ったが、なんて切り出せばいいのかわからないし、それ以前に何を言うのかすら決まっていけない。小此木は小此木でどうやら言いたいことがあるみたいなのだが、なぜか喋らない。そうやって30分近くも過ごしたんだから呆れる。

「…あのね、天沢さん」会話の口火を切ったのはやはり小此木だった。私には勇気が足りない。

「私、友達を一人失くしちゃったみたい」

「え…」予想外の話に、私は言葉を接げなかった。

「私ね、前の学校で友達だった子をいじめてたの。それなのに、自分では相手が私をいじめているなんて思いこんで、罪の意識から逃げてた。そりゃ嫌われるわよね」

「小此木が…いじめを」

「天沢さん、前に当てて見せたじゃない」

「あ、あの時はすまなかった」

「いいのよ、本当のことなんだから」

そして、彼女は急に穴があいたように表情をなくして続けた。

「天沢さん、私は本当は優しい子じゃないよ」

ふと漏らしたようできて、決然としたものを感じさせる口調だった。「いや、お前は優しい。私を助けてくれたじゃないか」その言葉に強い恐れを感じ、私は即答で否定した。

「きつとあなたの気を引きたくてやったんだよ。自分のためだよ」

「自分のためならあんな、命がけで私を守ったりしないだろう」

「別に命がけじゃないよ」

さも大したことではないように、彼女は言った。しかし私にとっては衝撃だった。彼女が私の大切にしている思いを壊そうとしているのかと疑った。何か言い返したかったが、彼女の考えがつかめなくて、私は不安の中に沈黙せざるを得なかった。

「天沢さんさ、さっきあの時のこと謝ったけど、なんで？」少しの間を置いて、彼女は突然話題を変えた。

「それは、小此木の気持ちを考えないで、傷つけたから」

あの時の小此木の顔。二度と彼女のあんな顔は見たくない。でも、そんな顔をさせてしまったのは他ならぬ私自身なんだと思うと、私の絶望は深まる。

「でも天沢さんの言ったことは正しかった」

「正しければ人を傷つけてもいいわけじゃない」

「傷つけ合わなければわからないことだってある！」

彼女は急に強く言い切った。私は驚いて彼女を見上げた。こんな口調で話す小此木を見たのは初めてだ。私はよほど情けない顔になっていたのだろう、彼女は表情をゆるめ、少し笑みを浮かべてみせた。

「天沢さん、なんで私がこんな話をしてるのかわかる？」

「いや、わからない」正直に答えた。

「それはね、天沢さんに私を知ってほしいから」

「お前を？」

「うん。天沢さんの言うとおり、私には優しいところもあるかもしれない。でもね、それはさっき言ったみたいな私のずるいところや、嫌なところと結びついてもあるんだよ。私は天沢さんには嘘をついたり自分をよく見せかけたりしないって決めた。だから、嫌な自分も全部見せるの。私の醜いところ、汚いところも知ったうえで、天沢さん、あなたが赦すなら、私はあなたに受け入れてほしい」

その時の私の気持ちを説明するのは難しい。抑えつけてきた感情のよどみがにわかにかき回されたように、泣きたいくらいの嬉しさや、強い憧れ、少々の寂しさ、親密感や孤独感が次々と湧き上がっては消えていく。

彼女と過ごした日々が脳裏を駆け巡り、その時々感情までもが鮮やかに再生され、私は想い出に翻弄された。

「ごめんね、急にこんなこと言っちゃって」

記憶の奔流から我に返り、目を上げると、思いのほか近くに小此木の顔が見えた。

「私を受け入れるかどうか、別に今決めなくてもいい」呟くようにそう言って、彼女は窓の外を見つめた。

「私はこれまで他人を傷つけないように、自分も傷つかないように生きてきた。臆病だったの。それでも楽しいこともうれしいこともあったから、構わないと思ってた。でもね、そうしては永遠に取り逃してしまうものもあるって、天沢さん、教えてくれたのはあなたよ。だから、天沢さんにこそ伝えたかったの」

「私にだって弱いところやだめなところがある。お前の気持ちを正面から受け止められないかもしれない。それがわかって言ってるんだな」不思議なことに、思考よりも先に言葉が発せられた。

小此木は黙ってうなずいた。私は少し声を落として続けた。

「それに、お前の告白が私を傷つけるかもしれないということも」

彼女は下を向けていた目を上げた。強い視線が私を捉える。

「あなたはその痛みを越えてきた。だからあなたがそれに怯えろとは思わない」

輝かしいばかりの言葉。それは、無意識に小此木に甘え、自分に都合のいい台詞ばかりを引き出そうとしていた私から、陰を取り払った。

「そう、だったな」私は、痛みを引き受ける決心をしたんだ。忘れてはならない。そして。

「私からも言わなくちゃいけないことがある」彼女の視線に負けなように見返す。

「これまで小此木に辛く当たったり、突き放すようなことをしたり、身勝手にふるまって本当にすまなかった。私も小此木と同じ、いや、もつとたちが悪かったんだ。だって私は自分が傷つきたくないだけ、そればかり考えて生きてきたんだから。小此木、私を赦してくれるか」

小此木は微笑んだ。

これまでも何度か感じていたことだが、小此木の虹彩は美しい日本人としては少し薄めのやわらかな茶色をしたそれは、もしかするとこれまでは、彼女の内面と外界の繋がりを遮蔽する、薄いけれど強靱な膜として働いてきたのかもしれない。

しかし、今私の目の前にある小此木の瞳は、私と彼女の隔たりではなかった。決して均質に澄んでいるわけではない、濁りや陰りもある。しかし、いや、だからこそ、それは決意の光に彩られ輝く心そのもののようで、私はその繊細な鮮やかさに息をのんだ。もつと見つめていたいと思ったから、腕を伸ばしてその美しさが壊れてしまわないようにゆっくりと包み、引き寄せた。

「イサコ」小此木が囁いた。「私たち、これから別の道に向かって、一緒に進もうって決めたのを忘れちゃだめだよ」小さくて安らかな声。でも、その声は優しさだけじゃなく、悲しみ、苦しさ、絶望を知り、それを乗り越えられるだけの力強さを秘めている。

「もちろん忘れるわけがない、ヤサコ」心と体に伝わってくる暖かさを記憶に強く刻み込みながら私は答える。

「そうだ、約束しよう。私たち、いつか花のように笑ってみせるって。その時、必ずお互いのことを思い出すって」

「うん、誓うよ。それが、私たちがともに進んだ証拠」

それが今までのところ彼女と会った最後だ。この後すぐ私は退院し、金沢へ戻った。

結局転校のことは小此木にもはっきりと伝えることはなかった。大黒小の皆は、私が何も言わずにいなくなってしまったと思っていたるだろう。でも、なんだかそれも私らしくて悪くない。橋本フミエや黒客の連中に一言の詫びもしなかったのは今でも少し心残りだが、あいつらにはエキサイティングな日常を提供してあげたんだから、それでおあいこだろうと思ったりもする。

最後に、大事なこと。「永遠の瞬間」はあった。傷ついた時、迷った時、私はそこに戻ってくる。そして、胸の奥に刻んだ誓いを確かめて、もう一度歩きだす。

そうやって、時は流れていく。約束を乗せて。

4・再び、夕べ（後書き）

本稿にて完結となります。

拙作をご覧戴き、ありがとうございます。

次は、金沢で母と暮らすイサコの生活について書こうかと思っています。本作では外的な事件が全くなかったので、そういったものも含めつつ。

引き続きお付き合い戴ければ、作者として望外の幸福です。まじで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3357i/>

電腦コイル いつか花のように

2010年10月8日15時26分発行